ACT! SPECIAL

MEDECINS SANS FRONTIERES
国境なき医師団

1999年
ノーベル平和賞受賞

2023 The Year in Review

2023年 国境なき医師団の活動

危険な故郷を離れ、避難民キャンプで暮らす親子。
男の子は栄養失調と貧血で国境なき医師団が
支援する病院に入院。回復しつつある。
／2023年5月、コンゴ民主共和国

あなたとつないだ、命の希望。
感謝を込めて、1年の活動を振り返ります。

© MSF/Michel Lunanga

2023年
国境なき医師団（MSF）の活動

イスラエルとパレスチナでの衝突をはじめ、
今年は、武力衝突や自然災害が多発し、
たくさんの命が危機に直面しました。
MSFは、そうした状況下でも
皆さまの思いのこもったご寄付に支えられ、
多くの人びとの元へ駆けつけることができました。
心より感謝を申し上げます。
2023年の活動の一部をご報告します。

2月～ 地震緊急援助
トルコ・シリア

最悪の人道危機に、追い討ちをかけた大地震。全てを失った被災者の元へ。

トルコ南部とシリア北西部で2月6日早朝に発生した大地震。長期化する内戦により、既に医療も物資も圧倒的に不足していたシリアの人びとは、さらなる窮地に追い込まれました。MSFは同国で活動中だったスタッフほぼ全てを動員。北西部の備蓄倉庫を開放して救援物資を配布するとともに、移動診療にも力を注ぎました。またトルコでも地元の援助団体とすぐさま活動を開始。被災地のニーズに応えました。

© Omar Haj Kadour

シリアでは、地震発生から48時間で、衛生用品や毛布などを含む救援物資270セットを届けた。

4月～ 避難民援助
スーダン

相次ぐ病院の爆破、そして枯渇する医療物資。混乱を極める戦闘下のスーダンで、医療を届ける。

4月15日以降、スーダン軍（SAF）と準軍事組織「即応支援部隊（RSF）」の間で激しい戦闘が続くスーダン。国内では多くの人びとが避難を強いられ、病院へ行くことさえ危険な状況です。人道援助団体も活動を制限される中、MSFは10州で活動を続行（10月現在）。ダダレフ州とジャジーラ州では難民や国内避難民に医療と清潔な水、衛生を提供。青ナイル州では栄養失調の治療や基礎医療に対応しています。

© MSF/Ala Kheir

ハルツーム州と北ダルフール州では、戦闘による負傷者の治療を提供している。

スタッフの声

『命を救う活動は、ご寄付があればこそ』

看護師 倉之段（くらのだん） 千恵（ちえ）

© MSF

緊急時には、撃たれた人、腕が飛んでしまった人、動脈を損傷した人――このような患者さんの手術が絶え間なく続きました。そんな患者さんが元気になって退院するたび、MSFがもしここで活動できなければ、どうなっていたのだろうと思いました。たくさんの患者さんを助けられたのは、皆さまのご支援のおかげです。

6月 栄養・マラリア治療
アンゴラ

子どもたちを襲う、栄養失調とマラリアの脅威。予防のための知識と手段を、地域に残す。

医療へのアクセスが難しいアンゴラの遠隔地。干ばつや大雨のピーク時に栄養失調やマラリアが多発しても適切な医療はなく、特に弱い立場にある女性と子どもたちの命が危険にさらされています。MSFは今年、ウイラ州では2月～6月、ベンゲラ州では4月以降、地元の医療当局と連携し、急性栄養失調とマラリアの治療に対応。また、予防と治療の知識を地域に残していくために、人材育成なども強化しました。

© Mariana Abdalla/MSF

母親たちを対象に、衛生や栄養、マラリアについての説明会も実施した。

患者さんの声

『娘の回復ぶりを見て、うれしい気持ちでいっぱいです』

ドミンガス・ルシアナさん

© Mariana Abdalla/MSF

ここへ来るまで歩いて2時間かかります。娘のフロレンサは生まれつき痩せ細っていてなかなかよくなってくれませんでした。でも、MSFの移動診療で重度の急性栄養失調とマラリアと診断され、その後、栄養治療を受けてからは、3週間で驚くほど元気になりました。本当にありがとうございました。

2023 >>> 1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 2024 >>>

2月 紛争下での医療
ウクライナ

紛争激化から1年。当たり前の日常が奪われた人びとを支える、医療援助と心のケア。

激戦地の東部から、安全な西部の病院へ。MSFは昨年の3月末以来、患者を搬送するための医療列車の運行を引き続きサポートしています。紛争激化から1年がたち、日々空襲を警戒しながら日常を送る人びとの中には、心の問題を抱える人も少なくありません。MSFは病院への砲撃が止まない南部のヘルソン州をはじめ、各地で心のケアを実施。6月に水力発電所が攻撃され、ダムが決壊した際には、土のうや発電機なども提供しました。

© Laurel Chor

南部ミコライウ州の移動診療所。住民の慢性疾患への対応も重要な課題だ。

患者さんの声

『息子の明るい変化に心から感謝しています』

オレーナ・ペダさん

© MSF

私たちは絶え間ない砲撃を受ける故郷を離れ、ここへ避難して来ました。8歳の末っ子のワーニャはこの仮設住宅へ移ってから、夜は不安でずっと寝つけませんでした。でも遊びを通したMSFの心のケアを受けてからは眠れるようになり、いまではだいぶ笑顔も増えました。

体験談の動画を視聴できます
スマートフォンから

通年 熱帯病治療
ナイジェリア

病原菌が顔の組織を破壊する「水がん」。MSFの専門病院が、患者たちの未来を照らす。

水がん（壊疽性口内炎）は、栄養失調や不衛生によって口内に発生する感染症で、壊疽が顔の表面まで達し命を落とすこともあります。主にサハラ砂漠沿いの国々で見られ、早期に治療すれば2週間ほどで回復しますが、患者のほとんどは貧困世帯で医療施設の不足や経済的な理由から手遅れになるケースが少なくありません。MSFはそうした人びとを救うため、世界でも珍しい水がんの専門病院を支援。無償で治療を行うほか、顔の一部を再建する外科手術や心理ケアにも取り組んでいます。

© Fabrice Caterini/Inediz

ソコト州でMSFが支援する水がん専門病院。免疫力の低い幼児ほど感染しやすい。

スタッフの声

『『私の顔、治せる？』あの問いかけは忘れられません』

形成外科医 ムハマド・ラワル

© MSF

アイシャさん（左の写真右側）は来院した当初、とても引っ込み思案でした。水がんで顔にできた瘻孔（ろうこう）つまり穴のせいで彼女は自宅の外に出たことがなく、学校に行くこともできなかったからです。ようやく打ち解けてきた頃、アイシャさんが私たちに問いかけた言葉に胸を打たれました。「私の顔、治せる？」。そこにいたスタッフ全員が、口をそろえて答えました。「治せるよ」。手術後の経過は順調で、お母さんも喜びを隠しきれない様子でした。いまはきっと元気に、学校へ通ってくれていると思います。

10月～ 地震緊急援助
アフガニスタン

不安定な情勢で、医療が圧倒的に不足。母子保健の提供に加えて、地震の緊急援助も実施。

広がる貧困、女性への規制強化、機能不全な医療体制により、医療や人道的のニーズが急増しているアフガニスタン。MSFは同国で長年、妊産婦のケア、栄養治療を含む小児医療、救急医療に取り組んでいます。また、10月7日にヘラート州を襲った地震は人びとに深刻な被害をもたらしました。MSFはヘラート地域病院で、直ちに大勢の負傷者の治療に当たりました。

© MSF

地震発生後、ヘラート地域病院の敷地内に医療用テントを設置し、緊急対応を行った。

スタッフの声

『元気に退院していく姿を見るのが幸せ』

小児科医 蒲部（かべ） 優子（ゆうこ）
2022年10月～2023年5月活動

© MSF

ヘラート地域病院で栄養失調の治療を行いました。入院患者は幼い子どもたちで、病室のベッドは常に満床。全力で治療に当たりました。慢性疾患や合併症を患っている場合も多く、命を救えず落ち込むこともありましたが、子どもたちが元気に退院していく姿を見ることが幸せでした。

10月～ 紛争下での医療
パレスチナ

衝突激化、負傷者であふれる病院。緊迫のガザ地区で医療を提供。

10月7日以降、イスラエルとパレスチナ・ガザ地区での衝突が激化。ガザ地区の病院は負傷者であふれ、燃料や医薬品も不足しています。MSFのパレスチナ人スタッフは、病院やガザ地区全域で助けを必要とする人びとのために懸命に治療を続けています。（10月29日現在）

最新情報はこちらから読めます
スマートフォンから

© MSF

10月7日の衝突後、医療物資の準備を行うMSFのスタッフ。

国境なき医師団（MSF）の捜索救助船「ジオ・バレンツ号」から下船する人の無事を祈って、別れの挨拶を交わすMSFのスタッフ。命を失う危険を冒しても、地中海を渡り欧州を目指す人びとが絶えない。
／2023年5月、地中海

（写真はイメージです）

来年も私たちと共に、
希望を次につなげてくださる皆さまへ。

特製アドレスシールをお届けします。

（2024年1月31日（水）受付分まで）

同封の専用払込取扱票で寄付してくださった方に、日々の郵便物などにお使いいただけるお名前とご住所を印刷したアドレスシール（1シート12片）をプレゼント。

アドレスシールの送付は3月中旬（領収書とは別送）です。

※2024年2月1日（木）以降にお受けした寄付については、印刷手配の関係で特製アドレスシールのプレゼント対象外となります。
※アドレスシールの送付や印字に関する注意事項を同封の専用払込取扱票の欄外に記載していますので、ご確認ください。

© MSF/Skye McKee

© Ezra Acayan

結核検査の待合室で、孫を抱き寄せる女性。マニラにある世界有数のスラム街、トンド地区では住居が密集しており、結核が流行。国境なき医師団は貧困で病院へ行けない人びとのために無償で結核の治療を提供している。／2023年3月、フィリピン

あなたの寄付でできること

国境なき医師団は、2024年も全力で走り続けます。

皆さまの引き続きのご支援が、命の岐路に立つ人びとの希望をつなぎます。

外科治療用のガウン

外科手術の際に医療スタッフが着用するガウンを、9着用意できます。

3,000円で9着分

© MSF/Franck Ngonga

マラリアの治療

子どものマラリアの治療を68回行うことができます。

5,000円で68回分

© Leonora Baumann

緊急医療キット

避難民110人に、3カ月間の医療を提供できます。

10,000円で110人分

© Charly Kasereka/MSF

栄養治療食

栄養失調の子どもたちに、840食の栄養治療食（RUTF）を提供できます。

30,000円で840食分

© Diana Zeyneb Alhindawi

※いただいた寄付でできることの一例です。外国為替による変動があります。

ぜひチェック&フォローしてください

国境なき医師団ウェブサイト
www.msf.or.jp

Facebook @msf.japan
Twitter @MSFJapan
Instagram @msf_japan
LINE @msf_japan
YouTubeチャンネル 国境なき医師団

感謝のメッセージ動画をお届けします

活動地から、支援者の皆さまへ。MSFスタッフの思いを、ぜひご覧ください。

スマートフォンから

寄付・ご登録情報に関するお問い合わせ

TEL **0120-999-199** 通話料無料（平日9:00〜18:00／土日祝日・2023年12月29日〜2024年1月4日休業）

ご登録情報の変更は上記までご連絡いただくか、マイページ（右の二次元コード）でお手続きください。

発行元：特定非営利活動法人 **国境なき医師団日本**
〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 FORECAST早稲田FIRST 3階

▲ 登録情報の変更はこちら